香取市域出土の土偶２題

安　井　健　一

１　はじめに

ここで紹介する２点の土偶は、利根川下流沿岸に位置する香取市で出土したものである。１点は当財団がかつて調査した資料の中から「偶然」発見したものであり、もう１点は詳細な調査が行われたことはないが当地において後晩期の大規模な集落遺跡として知られる貝塚において採取されたものである。いずれも一見地味な資料ではあるが、出土例が多いとは必ずしも言えない香取市域の土偶として重要な資料であると言えよう。筆者らは現在千葉県内出土土偶の集成を共同研究で進めており（千葉縄文研究会　2009)、今後の千葉県出土土偶研究に些かでも寄与するものがあれば幸いと考えて実測し公表するものである。

２　綱原屋敷跡遺跡出土の前期土偶

（１）遺跡の概要

綱原屋敷跡遺跡は香取市（旧佐原市）多田に所在する（第１図)。利根川の支流である小野川に面した標高約40mの痩せ尾根上に位置する。尾根の中央を東関東自動車道が縦断することとなり、(財）千葉県文化財センターによって1982・83年に調査された。発掘調査報告書は1991年に刊行されている（藤崎・上守他1991)。縄文時代の遺構は土坑９基が検出された。時期は出土遺物から前期後半～中期初頭が主体であると考えられる。完形に近い土器がまとまって出土した土坑もあり、土坑墓であった可能性が指摘されている。グリッドからは撚糸文～晩期初頭に至る長期間の遺物が出土しているが、出土遺物量の比率を点数で見ると後晩期が最も多く、次いで前期後半～中期初頭、早期という順番になる。ただし後晩期は遺構が伴わなくともそれなりの遺物量に達することが多く、数量だけを単純に早期や前期と比較することは危険である。遺構の分布状況や遺物のまとまり具合から、当遺跡の中心は前期後半～中期初頭と考えるべきであろう。

同時期の周辺遺跡として、利根川河口付近では粟島台貝塚、荒野台遺跡、香取市周辺では三郎作貝塚、毛内遺跡、下小野貝塚、天神後遺跡、小塚野遺跡、より上流の神崎町周辺では植房貝塚などが所在する。利根川をはさんだ対岸の霞ヶ浦周辺には、浮島貝ヶ窪貝塚や興津貝塚など重要な遺跡が多数立地する。前期後半の浮島式土器文化圏の中心的な場所であると言える。

（２）土偶発見のいきさつと公表に関わる経緯

この土偶は整理作業時には土偶であると認識されず、未報告土器片と共に収納されていた。筆者は1999年から2001年にかけて当財団の資料部資料課に所属し、こうした報告済み資料の再整理を行う業務に当たっていた。当財団で報告書を刊行した遺跡の資料は千葉県教育委員会の管理下となり、県立房総風土記の丘資料館（現：房総のむら）に収蔵される運びとなっていたが、当時は風土記の丘の収蔵スペースが不足しており、収蔵できない分を財団が仮保管している状況であった。また、そもそも風土記の丘資料館に収蔵するに当たっての分類方式も決められておらず不都合を生じることも多かったため、統一した分類方式を定める必要に迫られることとなり最終的には1989年に定められた「出土遺物等の移管時における整理方法について」に基づいた方式で整理・収納した上で移管することとなった。現在では当財団調査資料は基本的にこの基準に沿って移管のための整理を行っているが、それ以前あるいはその前後に報告された資料は態勢が整っていなかったこともあって基準に則っていないものが多く、そのうち財団仮保管分を整理し直す作業を資料課で行っていた。

綱原屋敷跡遺跡を含む東関東自動車道調査関連の資料の移管整理は1999年度より開始された。この遺跡はその最初期に着手しているが、箱数も50箱程度とそれほど規模も大きくないため特に変わったこともなく終わると思われた。ところが、たまたま報告書作成を担当されたうちの一人である石橋宏克氏が来訪し、整理作業を見学していた際にこの土偶の存在に気付いたも

のであった。遺構ないしは明確な包含層に伴うものではなく表土一括に近い扱いであったためあまり注意しなかったようである。すでに報告書刊行後かなり年数がたってはいたが、類例に乏しい時期の資料でもあり公表の必要性を強く指摘されていた。しかし当時の筆者は土偶に関してはほとんど知識もなく、まして全くなじみのない前期の土偶を公表するなど考えられないことであった。それから10年を経て土偶全般に対する知識もそれなりに備わると共に、こうした未報告資料の再検証や活用法の模索の必要性を強く感じるようになった。そこで数少ない千葉県出土の初期土偶であるという点の重要性を鑑みて、遅ればせながらここに実測図を公表することにした次第である。資料を「発見」し、筆者に公表を勧めて下さった石橋宏克氏に謝意を申し上げる。

（3）出土土偶について（第２図１）

土偶は胴部右胸部分の破片である。残存長2.8cm×残存幅3.4cm×最大厚1.3cm×重量12.2gである。胎土は全体に緻密で白色砂粒が若干混入しているが、植物繊維の混入は認められない。色調はにぶい赤褐色、焼成は良好である。頭部・左胸・腰部・手先側が欠損しているが、人為的か否かは不明である。肩から腕にかけて円弧を描くように整形され、その部分に断面円形の細い棒状工具を使用して連続刺突が施される。刺突は乳房側へ向かって斜めに施されている。特に前面から側面にかけては乳房を中心に放射状に規則正しく配されている。背面側はやや無秩序に見えるが、ごく新しいガジリがあるため、浅い刺突は失われている可能性が強い。胸部の乳房は剥落しているが、頭部および肩部から乳房側は、接合するための粘土が残存している。乳房へ向かう膨らみの曲線も残されている。

背面には「0 0064」と注記されている。当財団で行う調査では公共座標に則ったグリッドを設定し、アルファベットと数字の組み合わせで表記することが原則となっている。また、遺構番号は３桁数字かさらにその頭に「ＳＩ」「ＳＫ」といった記号を付すことになっており、綱原屋敷跡遺跡でもこの方式で調査を行い報告されている。この注記はいずれの方式にも則しておらず、表採ないしは表土一括といった状況を想定させる。土偶のガジリも農耕機械によるものと思われ、そうした推測を裏付けている。

（4）土偶の位置付け

そうした状況であるため供伴資料からの検証はできないが、形態などから現在のところ考えられる点を簡単にまとめておく。

時期であるが、出土遺物の量から考えて早期、前期後半～中期初頭、後晩期に絞られる。早期で最も多いのは沈線文系土器で早期全体のうち７割近くを占めるが、これまで知られている沈線文期の土偶とは全く異なる形状を呈しており、該期の可能性は低い。そして後晩期であるが、これも言うまでもなくいわゆる山形土偶や木菟土偶などとはおおよそ異質なものである。そして何よりも早期・後晩期とも遺構を伴わず包含層から遺物が出土しているのに対し、前期後半～中期初頭は遺構を伴っており、ある程度拠点的な性格であったことが推測されることである。千葉県において土偶の出土量が増える後晩期においても、そこが拠点的であるか否かによって土偶の出土量は明らかに異なる。「初期土偶」の世界においてもその点は共通すると思われる。

そこでこれが前期土偶であるということを前提に型式学的位置付けを試みたい。前期土偶を網羅的に分析されている原田昌幸氏によると、前期中葉から後葉にかけて頭部穿孔を特徴とする「大曲輪土偶型式」が東海地方から関東地方西部に広く分布し、関東地方には前期前葉から板状の胴部に四肢と頭部が表現される簡略化された形態の「井沼方土偶型式」が分布するとしている。そしてこれらから派生したと考えられる諸型式が存在することを予察している。これらの土偶型式に当てはめるならば、大曲輪土偶型式については南関東では千葉県柏市（旧沼南町）石揚遺跡例だけが知られており（第３図１）、時期も前期初頭とされていて当遺跡とは距離も時期も離れている[註1]。一方で井沼方土偶型式は関山式以降前期後葉まで関東地方に広く分布しており、板状の胴部に貼り付けられた腕の形状や乳房表現といった要素はこの井沼方土偶型式の中で理解するのが適切と思われる。代表例として埼玉県さいたま市井沼方遺跡（第３図４）の他、千葉県佐倉市の間野台貝塚（同２）、茨城県鹿嶋市の内畑遺跡例（同３）などが知られている。しかし集合刺突はこれらの事例には認められない異質な要素であり、その由来を探る必要がある。

東北の大木式土偶とされるものは、前期前葉は関東と同じく写実的な胴部表現を持つが、中葉に至ると胴部は乳房表現に代わって円文が施されるようになる。そのうち一部には胴部全体もしくは肩部に刺突が密に施されるものが認められる。小笠原好彦氏はＥ類ないしはＨ類と分類し、前期後半の大木５～６式に位置付

けている（小笠原　1984）。第３図５～９は胴部に集合刺突が施される東北地方の前期土偶である。いずれも仙台湾沿いを中心とした地域に分布する。全ての事例を確認したわけではないので断言できないが、こうした土偶に施される刺突は垂直ではなく斜め方向に施されることが多いようである（今熊野遺跡例の断面図に注目）[註2]。特に９の城生野遺跡例では刺突は極めて規則正しく配列されており、刺突方向も図を見る限り胴部中心方向へ向いている。この点は綱原屋敷跡遺跡例と酷似する。綱原屋敷跡遺跡の土偶の胴部形態は井沼方土偶型式のそれであり在地産であることは間違いないと思われるが、東北的な技法の流入があったとすれば太平洋に注ぐ古鬼怒川水系上にあたる当遺跡の立地とあわせて興味深い現象と言える。

３　神生貝塚出土の晩期土偶

（１）遺跡の概要

神生貝塚は香取市（旧山田町）神生に所在する（第１図）。利根川の支流である黒部川に面した標高42～44mの舌状台地上に位置する。

この遺跡が初めて報告されたのは吉田文俊氏の地名表による（吉田　1904）。ただしそこには「香取郡神ノ生村」と記されているだけで、出土遺物の記載がない。1928年には東京帝国大学によって地名表が公表されるが、これも実地踏査を行ったものではなくそれまで公表されていた成果をとりまとめたもので、「八都（ハツ）村大字神生」と記されているだけで遺物は不明である。このように遺跡自体は古くから知られていたものの、調査はほとんど行われず不明な点が多かった。1975年には斎木勝氏が利根川下流域の後晩期遺跡を紹介する中で、この遺跡について触れている（斎木　1975）。それによると時期は中期から晩期に及び、特に後期前葉から晩期中葉までの遺物が大量に出土する。調査歴はないが数十軒単位の竪穴住居跡が存在するものと推定され、地点貝層が２カ所確認されているという。土器の他に石器類も多数出土しているほか土偶や土製円盤も出土しており、出土遺物は「堀之内Ⅰ式、同Ⅱ式、加曾利ＢⅠ式、同ＢⅡ式、同ＢⅢ式、曾谷式、安行Ⅰ式、同Ⅱ式、姥山式、前浦式など」が確認されているという（土器型式の表記は原本のママである）[註3]。

1984年には山田町教育委員会による遺跡分布地図が刊行され、併せて行われた現地踏査の成果も公表されている（篠原・高野　1984）。神生貝塚は山田町の縄文時代を代表する遺跡として、向油田貝塚（中期）や山倉大山遺跡（草創期）と並んで紹介されている。そこからまとめてみると、遺物の出土が認められるのは中期からとされるがこれは図示されておらず具体的な時期は不明である。後期から晩期にかけては継続して営まれたものと思われ、堀之内、加曽利Ｂ、後期安行、晩期安行、大洞系土器の拓影図が公表されている。地点貝層については先の斎木氏と異なり４カ所と報告している。ちなみに千葉県教育委員会発行の埋蔵文化財分布地図は３カ所と記載されており、正確に把握されているとは言えない状況である。貝層の時期も、篠原・高野氏は中期であることを匂わせるような書き方をしているが、詳細は不明である。

周辺には後晩期に限っても数多くの遺跡が存在する。利根川河口付近には著名な余山貝塚が存在するほか、香取市周辺では大倉南貝塚、清水堆遺跡、良文貝塚、やや上流の神崎町周辺では（武田）新貝塚、奈土貝塚、古原貝塚などが存在する。また、分水嶺を越えた椿海側では多古田低地遺跡、久方貝塚などが所在する。茨城県側にはやや上流になるが学史に名高い福田貝塚や椎塚貝塚など土偶多出遺跡が目白押しであり、後期から晩期にかけての拠点的な位置を占める地域であることは言うまでもない。

（２）土偶発見のいきさつ

この土偶を発見したのは渡辺新氏で、1988年5月末に当地周辺の遺跡群を踏査した際、ここに立ち寄り採取したということである。現地は香取地方の下総台地では珍しく広大な平坦面が広がり、遺物の散布がかなりの地点で認められる。中期から晩期に至る拠点的な集落であることは間違いないであろう。採取地点は台地の縁辺に近いところで、周辺には多数の土器片が散布していたとのことである[註4]。資料の実測と公表を快諾していただいた渡辺新氏に感謝申し上げる。

（３）出土土偶について（第２図２）

土偶はいわゆる木菟土偶の頭部である。残存長8.3cm×残存幅8.1cm×最大幅4.5cm×重量149.0gである。胎土はやや粗く砂粒が多量に混入する。色調は褐灰色、焼成は良好であるが正面左側に多少熱を受けた痕跡が認められる。向かって右側の欠損はごく新しい（おそらく農耕機械による）ガジリである。他の欠損もあまり古くは見えず、縄文時代の破壊と思われる痕跡は認められない。

面貌はおしなべて木菟土偶の技法に忠実に従っている。ただし顔面の輪郭線がやや楕円形となり、鼻が輪郭から独立し始めている状況は晩期前葉の特徴を示し

ている。特に鼻は極めて写実的で鼻孔もリアルに表現されており、木菟土偶の伝統とは明らかに一線を画している。また、側面図と上面図を見れば明らかであるが、顔面全体が正面ではなくやや上方を向き始めており、この点も晩期的な様相を示している。眼と口は円板の貼付によって成形される。顔の輪郭及び眼・口の外形の隆帯は先端が尖った細い棒状工具によるキザミが施されており、後期末の木菟土偶の伝統を強く残す。頭頂部は欠損が著しいものの、前方一対、後方及び上方二対の扇状突起が認められる。突起に施される沈線は太く丸い棒状工具を使用しており、顔面輪郭や眼・口とは異なり晩期前葉に特徴的な手法である。後頭部はＲＬ単節縄文を地文として頭頂部と同じ棒状工具を使用した文様が描かれる。中心は対向する三角文と中間の円文であるが、厳密には円ではなく向かって右側の三角文と一体となった渦巻き文である。玉抱き三叉文が崩れた状態というべきか。左側には同心円と思われる沈線が認められ、おそらく耳表現であろう。胴部側にも弧を描く沈線が見られるが、どのような文様となるかは不明である。

（４）土偶の位置付け

木菟土偶については関東後晩期を代表する土偶という位置付けを与えられている一方、その地域相や系列など未解決の問題を多く含んでいるように思われる。特にその中心的な地位を占める大宮大地から離れた諸地域では、資料整備を進める必要性を強く感じている。そうした問題点を踏まえた上で、この土偶の編年的位置付けについて簡単にまとめておく。

第３図10～12は神生貝塚例に先行する段階と考えられるもので、10・11は鼻を含んだ顔面の輪郭がハート形を呈する。頭部及び背面に施される沈線も、細く鋭い棒状工具を使用している。特に11は眼の上側の輪郭が直線状であり、眉と輪郭が分離していた名残をとどめると思われ、後期末に位置付けられよう。12は11より後出的な段階と考えられるもので、鼻が独立し始めているものの顔面の輪郭は円形であり眼・口も輪郭線から独立している。頭部の突起も上方への突出が目立ち、後期的な様相を残す。これらに比べ10は顔面が楕円形になり口が輪郭線と合体し始める他、頭部の突起が前後へ突出するようになり晩期的な様相を見せ始める。ただし沈線の施文具はまだ細くて鋭く神生貝塚例より古段階であろう。13は現在大阪歴史博物館に所蔵されている著名な資料であるが[註5]、鼻の独立がより進行していることや口が顔面の輪郭線と一体化して半円状になっていることなど、神生貝塚例より後出的段階にあることを示している。正面と背面・肩部には渦巻き状の沈線が配されるが、神生貝塚例の背面中央の円文崩れのモチーフより「渦巻き化」が進行している。こうした特徴は安行３ｂ式の木菟土偶に典型的であり、園生貝塚例も該期といえる。

少ない資料での検証で決して十分とは言えないが、これらの資料の比較から当資料は晩期前葉の安行３ａ式の新しい段階に位置付けるのが妥当と思われる。

４　おわりに

本稿は資料紹介という域を出るものではないが、それでも資料分析と関連資料の探索を通じて県内出土土偶に関わる幾つかの論点を示すことができたと思う。最初に述べた集成計画の実行に当たり、こうした作業を通じて論点をさらに明確化し、今後の研究に向けての視座を固めたいと考える。

謝辞

本論をまとめる上で石橋、渡辺両氏の他、下記の方々にお世話になった。記して謝意を表します。

千葉縄文研究会、上守秀明（敬称略）

註

1）石揚遺跡出土の土偶について、筆者は報告書で早期条痕文期とみなしたが、これについてはすでに多く批判を受け、前期初頭とする認識が一般的になっているようである。確かに早期とする根拠に乏しかったのは事実でこの点については報告書の見解を撤回したいと考えるが、前期初頭とする見解には疑問が残る。この点については別途検討したい。

2）今熊野遺跡５の資料については報告書通り掲載した。この位置取りでは胴部下端ということになり、本論の対象から外れてしまうことになる。原田氏は1997年の文献で90度転回して掲載しており、腕と認識した可能性がある。そうすると本論の対象と合致するが、しかし同時期の他資料に比べ突出した大形サイズとなってしまう。

3）なお、斎木氏は「過去数年間、踏査を加えて膨大な資料を得、現在、整理中でいづれか諸学兄の参考に供したいと思っている」と本文中で述べている。それから30数年経てはいるが、貴重な資料が公表されることを大いに期待したい。

4）筆者らは遺跡の具体的な様相を知るため現地を踏査した。その成果については別の機会に報告したい。

5）現在この土偶の頭頂部は石膏によって復元されているが、これはある高名な考古学者によって1930年代に為されたものであるという。そのモデルは埼玉県滝馬室遺跡出土の木菟土偶であるということだが、安行３ａ式の滝馬室資料の頭頂部を安行３ｂ式である園生貝塚資料に復元するという、今では考えられないようなことが行われていたことになる。土偶の型式編年という考え方が表向きほとんど無かった（考えてい

た研究者ももちろんいたが）時代のエピソードと言ってしまえばそれまでの話であるが。

第３図引用文献

1　太田文雄・安井健一　1994『沼南町石揚遺跡』（財）千葉県文化財センター

2　喜多裕明　1996『千葉県佐倉市間野台貝塚』（財）印旛郡市文化財センター

3・7・8　原田昌幸　1997「発生・出現期の土偶総論」『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究会

4　青木義脩　1987「浦和市井沼方遺跡発見の土偶」『考古学ジャーナル272』ニュー・サイエンス社

5・6　小川　出　1986『今熊野遺跡Ⅱ』宮城県教育委員会

9　小笠原好彦　1984「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究１　考古学篇』清文堂

10　忍澤成視　1999『千葉県市原市祇園原貝塚』市原市教育委員会

11・12　石橋宏克　2004「土偶・土版とその他の土製品」『千葉県の歴史　資料編　考古４（遺跡・遺構・遺物）』千葉県

13　岡田茂弘・宇田川浩一　2000「園生貝塚」『千葉県の歴史　資料編　考古１（旧石器・縄文時代）』千葉県

参考文献（上記以外）

吉田文俊　1904「石器時代遺物発見地名表」東京人類学会雑誌第217号

東京帝国大学編　1928『日本石器時代遺物発見地名表（第五版）』東京帝国大学

斎木　勝　1975「利根川下流域における縄文後・晩期の遺跡について」奈和第14号

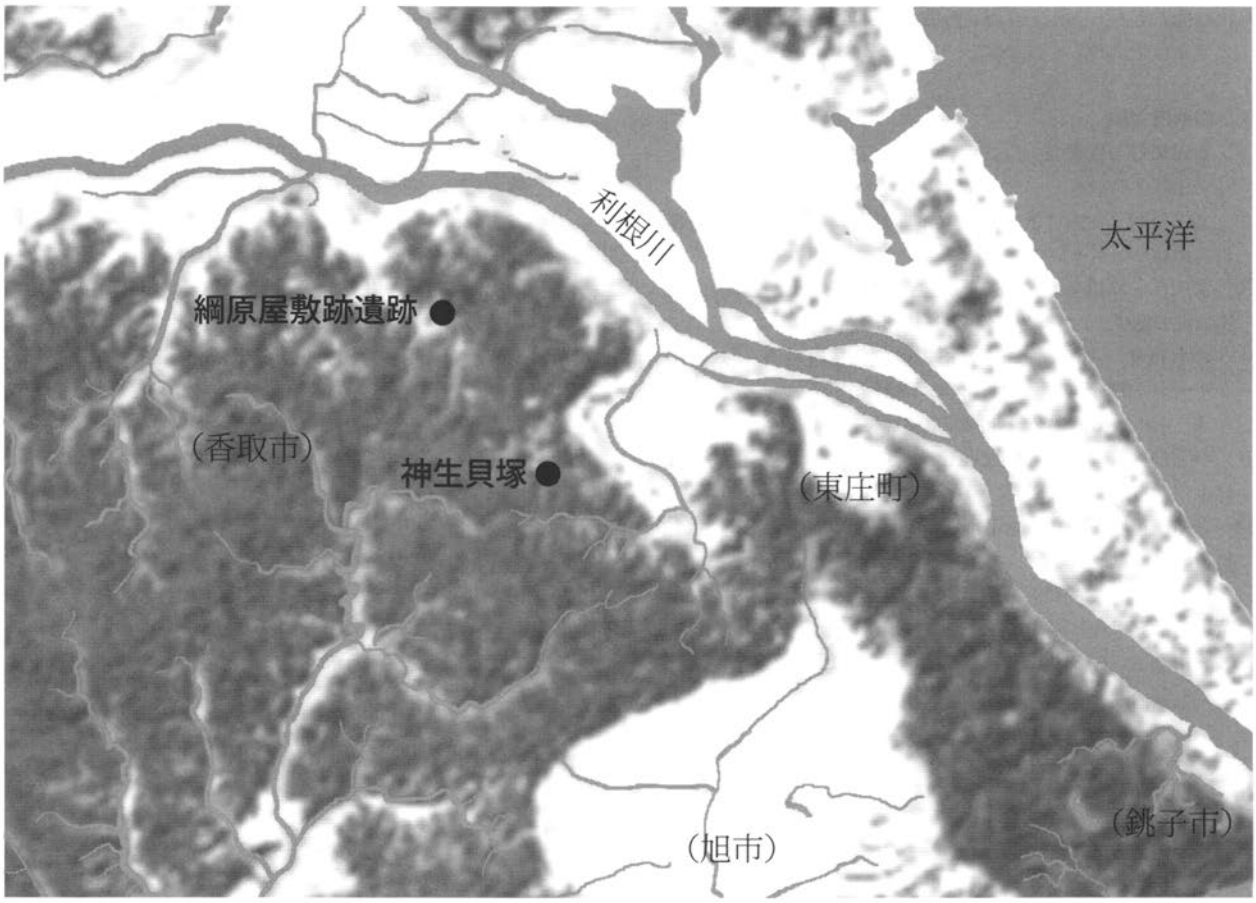
篠原　正・高野安夫　1984「調査とその成果」『山田町の遺跡　千葉県山田町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書』山田町教育委員会

藤崎芳樹・上守秀明他　1991「綱原屋敷跡遺跡（№42）」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅵ（佐原地区３）』（財）千葉県文化財センター

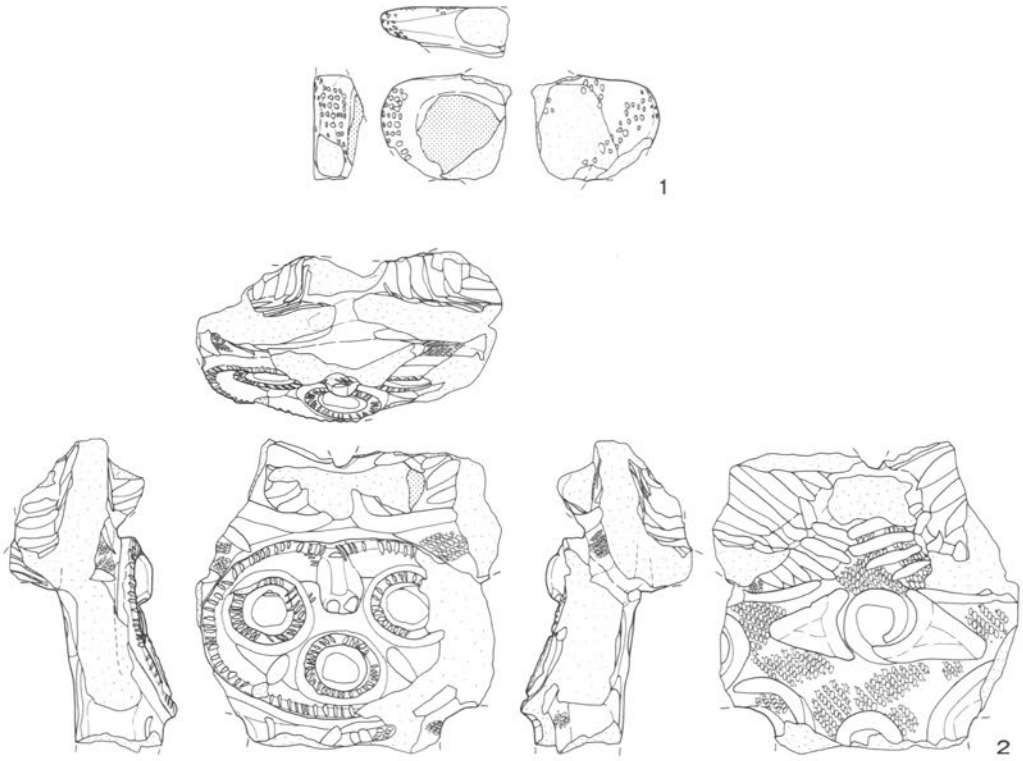
上野修一・瓦吹　堅　1992「ミミヅク土偶の変遷」『シンポジウム　縄文後・晩期　安行文化―土器型式と土偶型式の出会い―発表要旨』埼玉考古学会・「土偶のその情報」研究会

近藤　悟・阿部博志　1994「大木式土器分布圏の土偶について」『土偶シンポジウム２　東北・北海道の土偶Ⅰ　シンポジウム発表要旨』「土偶のその情報」研究会

千葉縄文研究会　2009「千葉県内出土土偶集成計画」千葉縄文研究第３号



第１図　遺跡の位置



※トーンは剝落を示す。

0　(1/2)　5cm

第２図　土偶実測図

1（石揚）
2（間野台貝塚）
3（内畑）
4（井沼方）
5（今熊野）
6（今熊野）
7（大木囲貝塚）
8（沼崎山）
9（城生野）
10（祇園原貝塚）
11（余山貝塚）
12（余山貝塚）
13（園生貝塚）

第３図　関連資料（S=1/3）